

# 第1章 ツイंकフルプログラムの概要



## 第1章 ツインクルプログラムの概要

本プログラムは、教員教育や学校教育プログラムを開発する ASEAN+日本の大学が協働し、世界に通用するグローバルな教員人材を育成するものである。その人材像は、「グローバルな視点をもとに社会に貢献するとともに、新たな教育を創成できる人材」であり、日本のみならず世界的に活躍できる人材の育成を目指すものである。

千葉大学において教育学研究科院生・学部生と工学，園芸研究科など理系研究科の院生の2者が協働し、千葉大学が世界に誇る先端研究を小・中・高等学校において展開可能な授業へと開発する。さらにこの授業および教材を英語化し、各年度約80名の院生・学部生を送りだし、この活動を通して ASEAN 諸国の小・中・高等学校で教育体験をするものである。そしてツインクルプログラムにより千葉大学・ASEAN の日本ファンを育成するとともに受講した大学院生がグローバル人材としての能力を獲得するものである。



このツインクルプログラムは単に院生・学部生を ASEAN 拠点大学に送り教育研修・研究体験するものではない。日本での準備期間に行う「授業研究」のなかで教育系学生と全学他研究科学生の2者が、ASEAN からの留学生とともにアウトリーチのための教材・授業研究という明確な課題に向かって協働することで異分野交流+異文化交流という2つの異なる交流を同時に深めていく画期的なプログラムである。さらにはこの構想実施の結果、グローバル教員養成とグローバル研究者養成

という2つの人材養成を同時に行う人材開発型教育プログラムを構築するものである。すなわち日本の教育現場の国際化にマッチしたグローバルな教育視点と能力を持つ教員養成システムを構築することと同時に、教育マインドを持ったグローバル研究者育成システムを構築するものである。

したがってこのプログラムの1番の特徴は2つの人材を1つのプログラムの中で養成・開発するところにある。すなわちグローバルな教育能力を持つ教員と、教育マインドを持つグローバル研究者の養成・開発である。実践的教育研究に取り組む教育学研究科と最先端科学研究に取り組む他研究科の院生とのカップリングはこれまでにない新たな試みであり、この両者のカップリングはお互いの教育・研究マインドに化学反応を起こし、グローバル人材としての相乗的成長を促すものである。両者の化学反応により生まれるグローバル人材は、単なる人材養成とは異なる「人材開発型」の教育プログラムの構築が行われることを意味する。このプログラムの遂行により育成された人材が、将来のASEANと日本の相互発展の担い手となる。すなわち教育学研究科、学部参加者に関しては日本・ASEANの懸け橋として、グローバルな視野を持った教育者としての素養を身につけることを目指す。この結果、帰国後は勤務校においてグローバル人材育成促進を行うリーダーとしての役割を担う。さらには教育研究における国際交流の担い手となることが考えられる。教育学部以外の研究科院生は、将来研究者を目指す者においては、将来ASEANにおいて研究活動をする素地として、将来企業に就職する者についてはASEANを中心にビジネス展開の基盤づくりをする。

これを可能にするのは千葉大学が理系を中心に世界に通ずる最先端研究を展開していることに加え、日本トップクラスの教員養成実績と規模を有する教員養成学部を持つ総合大学であるという点にある。さらに重要なポイントは、すでに千葉大学が構築済みのインドネシア大学、マヒドン大学(いずれもIECオフィス設置済み)など、ASEAN拠点大学との強固なネットワークを最大限に活用することで、素早く、確実にこのプログラムを軌道に乗せ、実効性の高い活動を展開できる点である。

ツインクルプログラムの1つのポイントは教員養成システムのグローバル化を目指すユニークなプログラムという点にある。千葉大学教育学研究科が主体となり次世代のアジアの教育をリードするグローバル拠点リーダーの育成を目指すものである。



さらに本プログラムのもう1つのポイントとしては、教育学研究科・学部が主体となり千葉大学全学の研究科との連携のもと、大学が推進している最先端研究成果のアウトリーチ活動を、インドネシアを中心とするASEAN加盟国について行う点にある。したがってこれまでも行われてきた一般的な日本文化紹介ではなく、技術立国としての日本文化の紹介によるASEAN諸国への日本の浸透活動である。さらに学齢期の児童生徒をターゲットにして、日本の科学・技術文化を通えることも今までにないユニークな取り組みといえる。

この背景にあるものは世界のグローバル化の潮流の中で日本がアジアとの相互協力的関係を保ちつつ持続的発展を続けることが必須となってきたことがある。ところが、バブルの崩壊とともに若者もしくは国民全体が安全志向へと、内向きの姿勢へと変化していったことで、世界へと目を向ける若者が減少している傾向にある。このような現状に対し、早期に英語や異文化への心理的垣根を取り払うことで、この傾向に歯止めをかけ、もう一度日本にチャレンジ精神あふれる若者を取り戻す、そのような教育プログラムを開発する必要性が迫られていることである。

さらなる問題として、経済のグローバル化に伴う人材のボーダレス化の進行がある。わが国に居住する外国人の数は年々増加し、それに伴い小中学校に入学する外国人児童生徒の数も増加しており、日本の教育現場のグローバル化が起こっている。現場の教員は必然的にグローバルな教育能力を持つことが求められているが、外国人児童生徒を視野に入れた教員養成は端緒についたところであり、急速に進みつつある教育現場のグローバル化に対応しているとは言い難いのが現状である。したがって海外からの人材流入に対応する教育能力獲得は喫緊の課題であり、本プログラムの重要なテーマである。



ツインクルプログラム実施による成果として目指すものは以下の3点である。

- ① 教育を軸としたアジアの大学コンソーシアムが形成される。
- ② 教育グローバル化に対応した教員養成，研修システムのモデルが構築される。
- ③ ASEAN での日本の大学及び教育システムのプレゼンスを高め大学のグローバル化を推進する。

これらの結果，教育を介しての貢献により ASEAN における日本の将来的なプレゼンスを高めるとともに，ASEAN を含むアジア全体の持続的な発展を推進するものである。

